

2-P-9

精神障がい者に対して「人間対人間としての深い関心を寄せる力」の構成要素の検討 ～ケアリング倫理の視点から～

木村聡子
津田右子 畑 吉節未

【はじめに】精神看護実践においては、対象者の困難や思い・希望に沿った援助をおこなうための「看護者の主体的な関係性の構築」が必要である。しかし精神看護学実習において早期に関係性が構築できる学生は少数であり、先行研究においてもこれらについて明らかにした研究は見当たらない。そこで、早期に関係性が構築できる学生の特徴を捉え、分析することで、精神看護学の教授法の手掛りが得られるのではと考え、研究に着手した。【研究方法】対象：2つの大学で同意が得られた看護学生6名。デザイン：半構造化面接データの質的帰納的研究。分析方法：M-GTAによるカテゴリー化。研究期間：2016.4～2017.3。倫理的配慮：本研究は神戸常盤大学研究倫理委員会にて承認を得た。【結果】分析の結果、以下の4つのコアカテゴリーを抽出した。①自分との共通性から普通の人と捉えその人の行動を意味があるものとして捉えなおそうとする②本来のその人が見えてくる③対象が本来持つ願いをつなぐ④二人の関係性の変化やそのきっかけを感じ取り、さらに近づこうとする。【考察】これらのカテゴリー間には関係構造の発展の順序性が考えられる。つまり、①対象の捉えなおしによって②本来の姿をみつけ出し③願いに気づき働きかけ④二人の関係性が化し、それに気づきさらに近づくと①捉えなおし→…といったサイクルがあることが示唆された。今後は早期に深い関係を築く学習プログラムの開発に取り組んでいきたい。

2-P-10

開口力に関連する口腔機能の検討

金久弥生
東 麻夢可 濱 清華 原 久美子 西村瑠美 深田恵里

【背景】正常な嚥下を完了するためには舌骨の挙上が必要であり、開口筋である舌骨上筋群の筋力が弱まると舌骨や喉頭の挙上量が低下し、食道入口部の開大が障害され誤嚥、咽頭残留のリスクが高まる。また、安全な嚥下のためには咀嚼により食物が粉碎され、唾液と混合された食塊の形成が必要であり、唾液分泌量の低下および減少は食塊形成を阻害する要因の一つであることがこれまでの研究成果により明らかとなっている。しかし、舌骨上筋群の筋力と安静時唾液が相互にどのような関連性を持っているかに関する検討はこれまでなされていない。

【目的】本研究の目的は、舌骨上筋群の筋力（開口力）と安静時唾液分泌量との関連性における相互関連性の検討・構築とする。

【方法】口腔保健学科 2016 年度生のうち本研究協力に同意の得られた 63 名に対し、(1) 開口力、(2) 安静時唾液分泌量、(3) 握力の測定を実施した。

【分析・検討内容】(1) 開口力、(2) 安静時唾液分泌量、(3) 握力の測定結果をもとに、開口力と安静時唾液分泌量の関連や開口力の差による唾液分泌量の違い等の分析・検討などを実施した結果を報告する。